

F-1 家庭経営の変動に関する生活史的研究——M家。家計記録と資料として

(1) 社会的環境と所得構造の推移

岩手大教育

後藤和子

他5名

目的 前報におけるM家の家計構造の推移をふまえて、本報では生活財の種類およびその消費量の推移を検討し、生活構造の推移と家庭経営の変動との関連を考察しようとするものである。はじめにM家の生活基盤をなす所得構造をあきらかにする。

方法 資料は前報の通りであるが本報ではとくに所得を各種の源泉別に分類し、その配分構造の推移をあきらかにするとともに、その社会的な要因および所得の変動に対応する家庭経営との関連を検討した。なお全期間36年間を社会的な出来事と家族周期を考慮して8期に区分したことは前報同様である。

結果 M家の所得の構造には、戦前・戦中・戦後と異なる3つのパターンが見られる。戦前は農業所得が50%以上、貸金利息や小作料など財産所得が約40%を占める地主的な所得構造である。戦中は農業所得が30%に低下し、農外所得はM氏の勤労所得と財産所得におよそ二分の小ていする。戦後は戦前戦中とほぼ同じ割合の財産所得に勤労所得を加えて約80%余となり、農業所得の激減という地主の没落を示す構造が見られる。M氏は、二男の戦死や長男の戦病に続く永い療養生活等から、後継者に期待がもてず、農業所得の低下した戦後において村長や銀行取締役など農業以外の社会的な活動による所得の増大につとめ、家計を維持してきたことが推察される。

家計運営についてソ年の所得を見直し、また年度の反省がなされているが、その内容は企業と家計は未分化の状態のまゝであり、家父長的な宰領の下に一括管理が行なわれていたということができる。